

洛中時衆寺院と祖師絵伝

——『一遍聖絵』完成七百年に因んで——

古賀克彦

本一九九九年は『一遍聖絵』（国宝指定名称は『一遍上人絵伝』）の奥書（巻12）にある正安元己亥〔一二九九〕年8月23日から七百年、一遍入滅の正応二己丑〔一二八九〕年8月23日辰刻から七百年に当たる。『一遍聖絵』は従来、作者として名を遺す聖戒（一遍の実弟・実子・甥説あり）が開山した六条道場歓喜光寺に伝来したので「六条縁起」とも称される。近年に歓喜光寺と時宗総本山藤沢道場清浄光寺（通称遊行寺）との共同所有となっている。

洛中時衆寺院

さて、中世に一大勢力を誇っていた「時衆」諸派は、近世幕藩体制下に遊行派本山を中心とする「時宗」教団として再編成されていくが、その遊行派の在京拠点が七条道場金光寺（通称遊行金光寺）と近代にその院代寺院を勤めた大炊道場聞名寺・五条坂法国寺（通称遊行）等であり、それと拮抗していたのが、四条道場金蓮寺と靈山正法寺である（六条派は早

くに勢力を失っていたようである）。では、以下に主な洛中時衆寺院の変遷を簡単に纏めておこう。

【派名】（※西暦を「」で補った）	秀吉時代	江戸時代	近代以後（備考）
原初地（道場名）			
【遊行派】			
七条道場金光寺			廃寺。東山長楽寺に合併
大炊道場聞名寺		東山二条へ移転	
五条坂豊国寺		法国寺	廃寺。歓喜光寺に合併
一条道場迎称寺		浄土寺村へ移転	
極楽寺（小川の誓願寺中）		浄土寺村へ移転	
東北院（二条→今出川）		浄土寺村へ移転	
高辻道場莊嚴寺	六条下寺町へ移転		
什谷道場福田寺	六条下寺町へ移転		
【四条派】			（時宗大本山となる）
四条道場金蓮寺			戦前、鷹ヶ峰に移転。
（塔頭）十住心院			戦後、「染殿院」と改称

洛中時衆寺院と祖師絵伝（古賀）

鳥辺野宝福寺	本尊は奈良平城院へ
【六条派】 六条道場歡喜光寺	（跡地は鎮守錦天神のみ） 五条坂へ移転。戦後、山科へ再移転
【御影堂派】 御影堂新善光寺	（時宗別格本寺となる） 戦後滋賀県長浜へ移転。
春日↓左女牛↓五条	
【靈山派】 靈山正法寺	（時宗大本山となる）
東山長楽寺	（一時西山寺院の傘下）遊行金光寺を合併
円山安養寺	寺地上知で円山公園に
塩小路道場白蓮寺（一時大派僧が住持）	戦後、山科へ移転
【国阿派】 真葛原双林寺	（正法寺と本末争い） 天台宗へ
【空也系市屋派】 市屋道場金光寺	（跡地は西本願寺・興正寺） 鎮守の市姫社と分離
六条下寺町へ移転	
西市屋道場西蓮寺	社僧を動めた松尾大社旅所と分離
【空也系鉢叩流「空也堂」派】 三条柳筥道場光勝寺	堀川蛸薬師（敵町）へ移転。
	天台宗へ

祖師絵伝

以上見て来た主要な「時衆」諸派のいくつかに、祖師（絵）伝が遺されている。以下にこれも纏めてみよう。

（浄阿・作阿・国阿に関しては、絵図のないものも含む）。

派名	称（通称、等）	巻	備考（現状）※◎国宝・○重文
【六】◎一遍聖絵（六条縁起）	（絹本着色。詞書下地に赤・緑・黄等の顔料が施されている）	12	巻1〜6・8〜12 歡喜光寺・遊行寺との共同所有。 巻6 断簡「片瀬の浜より江の島を望む」個人蔵。 巻7 東博蔵（但し3／4の詞書は歡喜光寺蔵）。
【御】○一遍聖絵（御影堂本）	（紙本一部着色）	12	六条縁起写本。巻1・2・4・9 12 前田育徳会蔵。巻3・7・8・個人蔵。11 4 卷着色、巻7 12 白描（奥書に「左女牛室町新善光寺御影堂納物」室町期）
【遊】一遍聖絵	（七条道場本）	12	六条縁起写本（江戸期）。 藤田美術館現蔵
【四】一遍上人絵詞伝	（四条道場本）	20	金蓮寺蔵（但し10巻本を上下2巻に分けたもの）。奥書「徳治二「一三〇七」年之天初夏上旬之候」
	（紙本着色）		

一遍上人絵詞伝 (紙本着色)		1	金蓮寺蔵(宗俊本)の巻8に相当。
浄阿上人伝 〔開山浄阿上人絵詞伝〕 (紙本着色)		3	金蓮寺蔵(木之本春溪寺〔詞書のみの冊子本1冊〕・同浄信寺〔詞書のみの巻子本2冊〕・早大図書館〔詞書のみの原稿〕に写本。『続群書類従』9輯所収「浄阿上人行状」(写本は内閣文庫・宮内庁書陵部・静嘉堂文庫、等)とは別内容)
浄阿上人伝(詞書のみ) ○一遍上人絵詞伝 (市屋道場本) (紙本着色)		4	金蓮寺蔵(原本1本、写本2本) 金光寺蔵(「宗俊本」の巻3・5・6・9に相当。但し焼失等で巻3の市屋道場の場面等を欠く)
空也一遍作阿三祖別伝 (並びに同〔注〕)			金光寺蔵(延宝6〔一六七八〕年頃か)。「三祖別伝・注」は西蓮寺蔵(元禄5〔一六九二〕年)
【霊】 靈山国阿上人縁起絵		11	現存せず。『親長卿記』文明19〔一四八七〕年9月27日条に、前年夏に旧本を紛失した為、新調、とある。
国阿上人絵伝		10	正法寺に伝来したが現存せず(絵・詞各5巻)
国阿上人絵伝 (詞書のみ)		5	軸 『国文東方仏教叢書』2輯の底本だが「金蓮寺蔵」と記載(金井博士は

国阿上人伝(詞書のみ)		5	正法寺蔵とも、両寺に現存せず 正法寺蔵(一九二三「T12」年7月10日、40世国阿〔岡実嚴〕が出身寺院の敦賀来迎寺本と小浜称念寺本〔同寺旧蔵文書に「国阿上人御伝記之事／正徳元辛卯〔一七一二〕稔初冬(中略)終に速に済写なり畢〕と照合して書写。尚、林讓氏は触れていないが、小浜西林寺にも国阿絵伝記(但し詞書のみ)が伝来する
国阿上人伝(詞書のみ)		5	安養寺蔵(「宗典」底本。江戸期の写本(後掲の知観による力)。奥書に「朱の出入靈山本伝之通也」と)
時衆宗靈山記		1	安養寺蔵(「靈山ノ記」と「国阿上人ノ伝」より成り、後者は「国阿上人ノ伝」を圧縮したもの。尚、原本は正法寺に伝来した松永昌琳筆のものであったが現存せず、寛政三〔一七九二〕年六月に安養寺塔頭の勝興庵「正阿弥」知観が書写)
靈山国阿光英問答		2	安養寺蔵(「宗典」底本)・龍大宮図書館等蔵(「時衆宗靈山記」に依拠。元禄3〔一六九〇〕年正月、葉仙寺住職〔10代直阿慈海力〕が大坂呉服

時宗国阿派宗義開出	町心斎橋筋角の書林岡田三良右衛門より出版したもの。同寺には現存せず）
安養寺蔵（『宗典』底本。『時衆宗鑑山記』と同筆力）	（現存せず。永正10〔一五二三〕年の年紀があるというから、次の「双林寺縁起」と同一力）
【国】国阿上人絵伝	（現存せず。永正10〔一五二三〕年の年紀があるというから、次の「双林寺縁起」と同一力）
双林寺縁起	現存せず（永正10〔一五二三〕年8月。影写本は東大史料編纂所架蔵。但し、金井氏の著作掲載写真（双林寺旧蔵）とは同内容だが、書式は多少異なる）

跋

では、これらの祖師（絵）伝が意味するものは何であろうか。勿論、宗祖・流祖・派祖・開山、等の顕彰・追慕、ひいては他派（寺）への優越であろう。これらは、特に洛中の貴顕や教養人を対象にしていると考えられる。本来、時衆は民衆への「語り物文芸」を担う「語り者」であった。だが、『聖絵』が当時としては（現在でもあるが）高価な絹本で作成されていることから伺えるように、後援者の存在が聖戒を故郷の伊予でなく、墓地のある兵庫でもなく、一遍が二度入洛した（特に最初と違い、二度目は賦算・踊り念仏とも大盛況であった）京都に留ませたのであろう。（尚、『聖絵』巻12最終段に、遺恩報謝の為、「一人のすゝめ」により絵巻作成に着手した、とある。これを「いちのひと」と訓読して九条忠教らの摂関・將軍職を指すと云う説が有力であるが、これは「一人のすゝめによりて此画図をうつし、一念の信をもよをさむがために」と対句であり音読すべきと考える。また敬語表現がない事にも留意。この辺り黒田日出男氏と同様の見解を有する）。空也ゆかりの作阿は勿論、上総出身の浄阿、播磨出身の国阿、遊行派も在京し拠点を置いたのも、武家・公家の勢力が集まった中世京都ならではだらう。

〈キーワード〉 時宗、一遍聖絵、浄阿、国阿、作阿

院大学、一九八三年4月）、等より作成。

（国府台女子学院教諭）